

憲問第十四

子曰、君子而不仁者有矣夫。
未有小人而仁者也。

子曰わく、君子にして不仁なる者有らん。
未だ小人にして仁なる者有らざるなり。

(14-349)

<子曰わく、君子にして不仁なる者有らん>

Q：「子曰わく、君子にして不仁なる者有らん」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子といわれる人物でも、仁の道にかなわない場合もある」の意。

(2)「君子は、立派な人柄ではあるが、聖人のように円満具足の域に達していないから、一時の過ちで仁道からそれることがあるかも知れない」の意。

<未だ小人にして仁なる者有らざるなり>

Q：「未だ小人にして仁なる者有らざるなり」とは何ですか。

A：(1)「しかし、学徳ともにそなわらず、器小なる小人が、仁の道にかなう場合はない」の意。

(2)「しかし、小人は、元来仁に志すことがないから、一時でも仁道にかなったことをすることがあったということは、まだ、かつてないことだ」の意。

(3)論語では、常に君子と小人とを対説する。君子は志ある人であり、学ぶ人であり、知者であり、修徳の人であるが、まだ仁者ではない。君子の最高段階が仁者であって、別なルートの人ではないが、仁者は完成者であり、聖域に達しているが、君子は未完成者でもある。故に、時には不仁に陥る場合もあるであろう。しかし、志のある者、知のある者、反省の力のある者が君子だから、長くその過ちに止まっていないうちに、君子の君子たるゆえんがある。孔子は君子を以て自らもゆるし、人もゆるしたが、仁者を以てゆるさなかったのは、このためである。

2011年6月24日林明夫記